十神山

会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会
〒692-0064
島根県安来市古川町534
TEL 0854-28-9988
FAX 0854-28-9393
http://www.y-hozon.com/
E-mail:admin@y-hozon.com

弟子と奮戦する自分を見つめて

資格審査員
渡部孝夫
（本部道場）

弟子とは何だろう。弟子とは私の芸を教える相手？　私と向き合う競争相手？　又は自分を売り込む手段？　教えるために苦しみながら自分が勉強する？

弟子と向かいあってどうしたら上手になるか、どの様に伝えるとわかってもらえるか。いろんな迷いや視界の先に曇った山を見る様な焦りにも似た思いになります。

金子みすゞ調に「どれでも」。のひと言。

二代目渡部音吉師匠が生前に、指導風景を見て唄の大先生にいったひと言「あげになんだかんだと、いっとうと、えんまに我が唄えんやーになーにね」と、心配の分でぽろりと漏らされた言葉を思い出します。

教えることは我が身を削り、消耗することです。長年修行してきた芸を惜しげもなく弟子に教える。これは単に我慢して根気よく教えることだけではなく、指導は伝える苦しみに耐えなければならんのです。

歌い手、三味弾き、鼓・太鼓、踊り手安来節の演奏は、西洋音楽の室内アンサンブルのスマートさより多彩で土臭いパワーがあります。

これもあるクラシック音楽の大先生が大きな地声で私の耳元で言ったひとこと。「西洋音楽は、王家や地主がスポンサーとなって私物のように育てた。日本の民謡は一人で歩き民衆に支えられ誰の援助も無しにやってきた。」と。だから、「こだま、いえ、だれでも」と、かるく受け流すには重い「クラシック先生」のひと言でした。

さて私も前例に出てきた弟子の様に、当時は指導や注意を受けてもそのほとんどが理解できなく、もちろん実地も出来るはずはなくひたすら〝無駄〟を重ねていました。

この〝無駄〟、本当は熱い自分の思いによる練習です。習った内容を反芻し、本当は反芻できるほど覚えちゃいませんけどね。年数を重ねるとある日突然に合点しそれが解決することがあります。

いま、付けてもらった稽古を振り返ると、三味線の基礎を徹底して教わった様に思います。その内容は残念ながら詳細に覚えていませんし、理解も十分とは言えませんでした。しかし、弟子を持ち、無から教えていくと不思議なことに過去のことを思い出すのです。

兄弟弟子連はドンドン先へ進んでいくというのに、いつまでも重ね撥や、ハジキを稽古していると取り残された様に思いました。今思えば徹底した基礎にこだわり、納得がいくまでやっていたのかな。

こんなこだわりが後年効果となって出てくることを実感しています。

聞いて頂くお客に届く演奏法と言うよりは、メロディーの表現の仕方を教わったその内容をよくおぼえています。土台となる基礎がしっかりしていないと上達しないものですね。

例えば、唄についても安来節を単に唄うと言うより、自分の思いを届けるのに発声という基礎がしっかりしていないと聞く方にとってよい印象は残らないでしょうね。総じて民謡は聞く人の評価に依るところが多いわけですが、演ずる人は癒しとか感動を与えられれば最高でしょう。

義太夫三味線の人間国宝、鶴澤清治のことば「年令に応じて芸は枯れていくと人は言う。私は枯れた芸はいらないので、弾ける間は伸び続けたい。」と言っています。

気性の荒い鶴澤氏、学びたいものです。

壮大な清水寺の往時をしのぶ

―安来・清水寺古道ウォーク㊦

並河健蔵

昔の表参道であった山峡を登って、漸く辿り着いた清水寺の仁王門は、蒼然として立ちはだかっている。門の両脇には阿吽（あうん）の仁王像が安置されてあり、「阿」は修善金剛、「吽」は止悪金剛で、江戸時代の作といわれている。松江藩主・松平不昧公の揮毫（きごう）になる。「瑞光山」の扁額が掲げてあり、かつての往時を偲ぶ思いがする。さらに長さ二メートル、幅八十センチの巨大な草鞋（わらじ）が掛けてある。五年前に門生（かど）町の人々が編んで奉納したものだ。

瑞光山・清水寺は、用命天皇二年（五八七年）に尊隆上人によって開かれた寺院で、天台宗に属している。盛時には僧坊四十八を数える山陰随一の伽藍を誇っていた。しかし戦国時代、尼子・毛利の戦火にあい、現存の根本堂を残して全焼したが、その後、松江藩の庇護の元に再興されて現在に至っている。

清水寺の仁王門。両脇に仁王像があり、大きな草鞋が目を引く。

仁王門から境内への坂を下る。左手に立つ千年杉の間には、精進料理の老舗がある。精進料理は佛教と深い関わりをもち、食材は山海の季節の物であるが、魚や獣は使わず、それに似せて膳に出すのが山菜料理と違うところだ。例えば「精進いか刺し」は、蕨（わらび）粉を用いて烏賊（いか）の刺身のように作ったものである。

献立の中に芥子を紫蘇（しそ）で巻いた「嬉し乃（しの）」についての面白い逸話がある。昔、殿様が賞味された折、余りの辛さについ涙をこぼされた。お付きの侍が慌てて伺うと、殿はさりげなく「嬉しいのう」と言って目頭をおさえられたそうだ。献立を詳しくは言うまい。割烹の主人が精進して調理した逸品である。まずは賞味することだ。

坂を下った左手に宝蔵庫があり、国指定重要文化財の十一面観音立像や阿弥陀三尊坐像などが安置されている。多くの貴重な佛像に囲まれながら拝観していると、自ずから信仰心が湧いてくる。

明徳四年（一三九三年）建立の根本堂は、国指定文化財で、目下、大修理中であり、この春には拝観できるという。根本堂から見下ろすと光明閣がある。観音様の教えを体得する道場との思いで、こう名付けられたといわれている。室町時代に作られた書院の庭園は玉落ちの滝や一文字池を配し、周りは老杉に囲まれて、松江藩歴代の藩主が愛でられた由緒ある庭園である。

一方、文化年間（二〇〇余年前）に、参道の大門が再建された際に、その古材で築造された蓮乗院の茶室・古門堂は、独創的な構造である。茶室に至る露地には、一条の光をおびて落ちる男滝と岩の苔を滑べる女滝があって、閑静な趣がある。

根本堂の脇を通り抜けると、このウォークの往路の終点となる清凌亭に着く。前庭には「薩雲若（そうにゃ）の池」があって、四季折々の山の風情を映してきた。一行は清凌亭で心ばかりのもてなしを受けて少憩し、境内を心ゆくまで散策した後、ゴールである道の駅・あらエッサへ向かって、あの古道を帰ることになる。

境内のどこからでも仰ぐことの出来る三重塔は、江戸時代の末、恵教和尚と真淨和尚さらに棟梁・富谷三代にわたって三十三年をかけて、建立されたものである。安来の灘で三年間海水に浸し、堤池で三年間汐を抜き、乾燥三年の長い下準備の期間を経て、高さ三十三・三メートルの総檜造りの塔が完成した。山陰地方随一の文化財である。

この塔から俯瞰する清水寺は、深山幽谷に溶けあうように伽藍や多くの僧坊が、凡そ千四百年前から築かれ始めたことにおどろく。永い歳月をかけて自然と調和しながら造成されたものだ。それも多くの信者たちの佛に帰依する深い信仰心と強い絆があったからであろう。

創立100周年記念 唄の競演 安来節CD 発売中

価格　2,000円

■販売所：安来節演芸館
観光交流プラザ（安来駅内）

■問合せ：五代目 富田徳之助
申込先　TEL/FAX：0858-73-0681
携帯：090-8994-2934

出演者

三味線：五代目 富田徳之助
唄：二代目 松尾英興
大西佐知子
二代目 高山保子
名越三佐子
鼓：二代目 松尾英興
鼓・太鼓：曽我友久

収録曲

1. 安来節　素唄・師範字余り
2. 安来節　素唄・師範字余り
3. 安来節　素唄・師範字余り
4. 安来節　素唄・師範字余り
5. 安来節　大師範字余り・貝殻節入り
6. 安来節　大師範字余り・博多節入り
7. 安来節　大師範字余り・真室川音頭入り
8. 安来節　大師範字余り・出雲追分入り

私と安来節

安来の宝日本の宝 安来節

指導部員
丸瀬千登世
（本部道場）

昭和五十五年、安来節のあの独特なリズミカルな三味線の音に魅せられ丸瀬一宇師匠の門をたたいた。以来三十三年、丸瀬先生は安来節の師匠であるとともに、百パーセント信頼できる私の人生の師匠ともなっている。

習い始めの頃に聞いた全国優勝大会や唄い初め会に唄われる安来節は、何でこんなに素晴しい民謡なんだ！と改めて感動したもの。その感動する安来節を目指して今日まで来たにもかかわらず、私は中々その域に近づいていない気がする。

安来節の唄は勿論の事、その三味線伴奏は全国でも秋田荷方節等と並んで日本三大難曲とも言われている。その難しい安来節だからこそ全国でも注目されている。

日本民謡協会が主催する民謡民舞全国大会にほぼ毎年伴奏者として出場させてもらっている。そこで感じるのは、やはり安来節の素晴しさである。三味線と鼓が唄い手を盛り上げ、それに応えて唄い手が精一杯感情を込めて唄う。大舞台では伴奏三割、唄七割と言われる中で、それがうまくかみ合ったとなればこれほど素晴しい民謡はないのだ。

聴く人に感動を与える安来節、それは色々な要素がある。安来節保存会は正しい安来節を後世に伝え普及しなければならないという大きな役割がある。しかし、それにこだわり過ぎて、舞台で演ずる自分の事ばかり考えているようでは聴く人に感動は伝わらない。もっと聴く人の事を考えて舞台に立てば安来節は今以上に全国に親しまれる民謡になるのでは。

親が子に子が孫へ
伝え伝えた安来の宝
どじょう掬いに安来節
（丸瀬一宇作詞）

私と安来節

富田光雄
（宍道支部長）

私と安来節との出会いは高校最後の文化祭で銭太鼓を数十名で演技披露し、拍手大喝采で今から思えばその出来事が安来節を始めるきっかけだったかなと思います。やがて近くで「直江民謡同好会」という会がある事を知り、練習風景を見に行きました。そこで絃を弾いておられた上野公美先生と出会い、絃と唄を習う事になり、昭和四十八年に先生の勧めで宍道支部へ入会しました。

昭和五十年には出雲俊之助先生からの勧めで中島芸能社に所属する事になり、社長が中島清志先生（後の四代目富田徳之助師匠）でした。上野先生の了解を得て、昭和五十一年から内弟子として通う事になり、平成元年には富田姓を認可されましたが残念な事に平成二年三月に師匠が他界されました。

平成三年に絃・大師範に昇格、この度は准名人に昇格させて頂きました事は偏に四代目富田徳之助師匠をはじめ、諸先生方、諸先輩方、支部の方々のお陰と深く感謝しております。また、ここまで安来節を飽きずにやって来られたのは温かい家族の協力があったからだと感謝しています。安来節を通じて色々な人との出会いがあり、また全国的に知り合いも多くなり安来節をやっていて本当に良かったと思っています。どうか今後共皆様方の御指導、御鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

私と安来節

渡部弘充
（本部道場）

この度、光栄にも絃・准名人にご推挙いただき、この栄誉に対しまして身の引き締まる思いで一杯でございます。これも偏に保存会の皆様方のご厚情とご指導の賜物と深く感謝申し上げます。

私の出身は初代出雲愛之助師の生誕地、雲南市加茂町です。振り返ってみると幼少の頃は祭りと言えば稲はでの木や竹で組んだ舞台で興業安来節を見聞きしていました。また、組内での新年会等は持ち回りの当家で行われ、お酒が進んでくると必ず安来節や関乃五本松節を手拍子で唄い回しされていた事が思い出されます。

私と三味線の出合いは小学五年生（昭和三十四年）の頃です。当時、葉タバコの栽培が盛んに行われていて、我が家も励んでいました。その中で乾燥した葉を手作業で掃除し、選別といってランク別に分ける行程があり、専門の選別士が泊りがけで行っていました。その人が三味線を持って来て安来節を弾いていた事が思い出されます。また、雲南地域の盆踊りは古大寺踊りが盛んで同じ町内の岸本文市という人が三味線伴奏されていたのを身近で見聞きしていました。

昭和四十九年、当時勤めていた会社の中で現在、絃・准名人の越野幸吉先生が中心となり「民謡クラブ」を故 金山久夫師を迎えて発足されました。私もきちんとした唄を覚えたいと入会、その後、故二代目渡部音吉師匠に数人で習い始めました。指の運動と称して童謡から津軽三味線まで数多く教えて下さり、また師匠は早くからイベントやお座敷の舞台に上がる機会を与えてくださいました。師匠の音の響き、力強さ、間やテンポ等々、まだまだ未熟でありましたが昭和五十六年に渡部姓を許していただきました。そして先輩先生方との出会いを築かせていただき、勉強させていただきました。そうした経験を積ませていただいたお陰で今の私があると心より感謝しています。奇しくも次の百周年のスタートの年に准名人に昇格させていただいた今、今日まで安来節を続けさせてくれた妻に、また家族に感謝しています。今後は更に精進を重ね、微力でありますが安来節保存会の発展の為に尽力して参りたいと思いますので、変わらぬ御指導、御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

これからの安来節

富田英好
（加茂支部）

安来節保存会創立一〇一年目を迎え、長い歴史を歩んできた恵沢な安来節、昭和五十一年から習い覚えて三十六年、平成二十四年一月十日絃准名人の免状を拝受し、身の引き締まる思いと多くの先輩の皆様方に敬意と深く感謝を申し上げます。

初心貫徹忘れる事無く自分自身に厳しく叱咤激励し精進を重ね、肝に銘じて長い歴史と先輩方の礎を築き育てた技を多くの方に伝承継承して行き、微力ながら粉骨砕身し共栄したいと思っています。

故 三代目富田徳之助先生、諸先生、加茂支部の皆様にあらためて感謝致します。今後とも保存会発展普及に少しでも貢献できるよう努めますので保存会の皆様の一層の御指導の程よろしくお願い致します。

私と安来節

渡邉怜子
（米子支部）

私の実家は夕食後に皆で民謡を唄うという賑やかな環境で育ちました。小学校の遠足のバスで安来節を唄ったり、高校の文化祭でも唄い、優勝して賞状を持って帰りましたが、「子供は子供らしい唄をと…」母に叱られました。

昭和四十五年ラジオ番組でサークル紹介コーナーがあり、米子支部を知り、故 初代砂川清先生より米子市公会堂での練習日を聞き、出掛けました。そこで故 国尾拳治先生が「月に一回位ではなかなか上手くならないから、うちに来なさい」と言われ、入門しました。今まで父から教わった我流でしたので、テンポに合わせる事が大変でしたが、必死で勉強し、三年で師範に昇格、師範で二年連続優勝も出来たお陰で、昨年の百周年記念イベントにも出演させて頂き、生涯忘れられない思い出となりました。これも御指導頂いた師匠を始め、諸先輩方、応援してくれた家族に感謝しております。

平成八年に難病を発症し、現在も通院加療中ですが、大好きな安来節に助けられ、頑張る事ができ、唄の准名人にまでして頂きました。今年古希を迎え、残された人生、微力ではありますが、安来節発展に貢献できるよう頑張って行きたいと思っております。入会して今年で四十二年になりますが、五十年目指して病気とも仲良くつき合い、頑張りたいと思っております。

最後になりましたが、安来節保存会の今後益々の御発展を心よりお祈り申し上げます。

㈲仁木三味線
製造・販売/修理　三味線・鼈甲撥・尺八・太鼓
〒240-0022 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西久保町197-1
TEL 045(713)4319　FAX 045(741)4796
HPhttp://www.syamisen.com/

大小鼓製造卸販売
杉本鼓店
住　　所：島根県松江市馬潟町360-13
電話・FAX：0852-37-2033
E-mail：ks36013@web-sanin.co.jp
※通信販売も致しますので、お気軽にお電話ください。
修理、下取りもご相談ください。

私と安来節

渡部二郎
（松江支部）

昭和三十七、八年頃（私が小学三、四年生の頃）ＮＨＫ松江放送局のラジオで「安来節の時間ですよ」という番組が放送されていました。その時の出演者（敬称略）唄・二代目出雲愛之助、三味線・三代目富田徳之助、鼓・高山雅市の三名でいずれもあの頃いわゆる油ののりきった方々、ラジオのボリュームをいっぱいにして聞き入った事を思い出します。

そして十数年後の昭和五十年の夏、職場の同好会（民謡クラブ）の講師にあの時の三名の内の一人、三代目徳之助先生を呼んだのが私の本格的な安来節との出会いです。唄と三味線を習い始め、先生の勧めで保存会に入会し、昭和五十一年六月の審査会で唄と絃、両方二級に合格、五十五年に絃師範に合格し、その年から十六年連続優勝大会に絃の部で出場出来た事は私自身の宝物と思っています。そして平成九年一月絃大師範に昇格して現在に至っております。

私の人生七十年の内半分以上の年月安来節に携わって来ました。おかげで本業の仕事以外の人々との交流もでき、また多くの恩恵を受けました。これに対し、恩返しをしなければと思っていますが、取り立てて何をして良いやらわかりませんが、私なりに健康管理に努め、体力の続く限り永く安来節を愛し、精進する事が恩返しの一端になるかなと思っております。今後とも皆様方の御指導の程よろしくお願い申し上げます。

安来節と私

一宇川てい子
（本部道場）

一昨日、朝日カルチャーセンターの教室に出向き、受講生が10人ほどになり、今までよりもまして、指導に熱が入りました。最近では、若い女性も増え、「一度やってみたかったんです」と、言葉が返ってきます。

私がどじょうすくい踊りに出会いましたのは、18年前の夏になります。安来市役所より、師匠を紹介していただき、師匠の家に二晩通い師匠の踊りに感動をし、今に至っています。ランニングと短パンの姿でしなやかに、全身での表現、笑顔があり、ユーモアあり、本格的な舞踊であることに心惹かれ、師匠の踊りを伝授したいと、その場で弟子入りしました。それから、大阪教室に月1回ペースで通い、夢中でその所作を覚えてきました。「場数を踏むこと」との師匠の教えに沿い、知り合いの寿司店の宴会にボランティアで出演したり、機会を作り、人前で踊る回数を増やしてきました。師範に昇格後、読売や朝日カルチャーでの講師を勤めながら、数カ所で教室も持てるようになりました。海外への文化交流を始め福祉施設ボランティア等で沢山の笑顔と出会いました。昨年、読売カルチャーの一期生の一人が師範に昇格し、胸熱くなる思いでした。最近は、東京都内の小学校でゲストティーチャーとして、どじょうすくい踊りを子どもたちに伝えています。

この度、大師範に昇格し、身に余る光栄に思っています。これからの保存会の益々の発展に微力ながら力を尽くしたいと思います。

支部情報

瀬田の唐橋を歩いて渡る

矢倉義法
（尾高支部長）

平成二十三年の尾高支部恒例の研修旅行は滋賀県大津市瀬田の瀬田川に架かる全長二百六十メートルの瀬田の唐橋を歩いて渡ろう、しかも「瀬田の唐橋百二十五間……」と唄いながら渡れば上手に唄える様になるかも？と遊び心が沸く。

バスを降り、唐橋の西詰から歩き始めると中洲があり、そこには・俵藤太の百足退治由来が記されておりました。その由来の前で記念撮影。そこからは三三五五とグループになって安来節を唄って渡る人、無言で渡る人と様々でした。揃いのユニホームの団体が唄を口ずさんで歩く姿は、丁度通勤通学の時間帯であったので、多くの自転車や歩行者と行き交いがあり、すれ違うごとに振り返ってはもう一度、不思議な顔をして見直す光景も見られ、勇気が要る渡橋経験でした。この橋は「勢多の唐橋」とも「瀬田の長橋」とも謂われ、日本三名橋・日本三古橋の一つとされている。当初の橋は現在の位置より六十五メートル南に架かっていたそうだが、織田信長が現在の位置に移し、瀬田城主の山岡景隆によって九十日で完成させたと言われている。木橋が現在のコンクリート製になったのは昭和五十四年だそうだが、唄の文句にある唐金の擬宝珠は歴代受け継がれているようで「文政」「明治」等の銘が入ったものも現存していた。

琵琶湖から注ぎ出る川は瀬田川しか無く、東から京都へ向かうには琵琶湖を渡るしか方法が無く、瀬田川に架かる唯一の橋であった瀬田の唐橋は京都防衛上の重要地であった事から、古来より「唐橋を制する者は天下を制す」と言われたそうだ。「この唄を制すれば安来節を制する」となるかも？

唐橋の上から望むれど、上流には国道一号線、ＪＲ東海道本線等で遮られ、膳所の城の水写しは覧られない、もっとも現在では膳所の城は石垣だけとなっていますが、当時は琵琶湖に突き出した土地に築かれた水城であり、大津城、坂本城、瀬田城に並ぶ「琵琶湖の浮城」の一つと言われ、本丸には四重四階の天守が上げられ、水面に映える姿はまさに「橋の上から眺がむれば、水に浮かぶは膳所の城」と謡われていたそうです。瀬田の唐橋を個人的には幾度も自動車で渡りましたが、今回の様に歩いて、しかも大胆に安来節を唄って渡る事はもう無い事でしょうが、前にも述べました様に「唐橋を制する者は天下を制する」のごとき、尾高支部の会員全員がこの唄を制する事が出来る事を願いつつ渡りました。この後の旅行の行程は、江、浅井三姉妹博覧会・国宝彦根城と研修旅行は続きます。今回の旅行は歩く所が多く、老体が悲鳴を上げましたが、皆楽しく無事で帰る事が出来ました。

補　足

瀬田の唐橋が「急がば廻れ」の諺の発祥であることをご存知ですか、「武士（もののふ）のやばせの舟は早くとも急がば廻れ瀬田の長橋」（宗長詠み）東から京都へ上るには矢橋（やばせ）の湊から大津への航路が最も早いとされていたが、反面、比叡おろしの強風により船出、船着きが遅れる事も少なくなかった。瀬田まで南下すれば風の影響を受けずに唐橋を渡ることができ、日程の乱れることも無いとして、これを「急がば廻れ」と詠んだものだそうです。

俵藤太大百足退治由来

朱雀天皇時代、三上山に棲む大百足が魚たちを喰い殺し困っておりました。そこで琵琶湖に住む龍神の娘が大蛇に化身し、唐橋の上で強い武将を探していたところへ俵藤太と出会い頼まれ、事の訳を知った藤太は大弓を抱え大百足に挑みましたが、一本目、二本目と鉄の様に跳ね返りました。藤太は焦り、最後の矢の先に自分の唾をたっぷりと塗り、射放つと大百足の眉間に突き刺さり退治されました。藤太は人間の唾液は百足を溶かすと言う事を思い出したそうです。数日後、竜王から沢山の礼品が送られて来たそうです。

財団法人 日本民謡協会

平成24年度 民謡民舞首都圏大会

東京・神奈川・千葉・埼玉

■日時　平成24年 5 月12日（土）・13日（日）
　　午前 9 時開場
■会場　江戸川区総合文化センター（大ホール）
■主催　財団法人 日本民謡協会 民謡民舞首都圏大会実行委員会
■後援　財団法人 日本民謡協会

入場券　2,000円（2日通用券）

申込み（問合せ）先
財団法人 日本民謡協会
安来節保存会関東地区
安来節関東連合会関東支部
安来節保存会関東支部幸手　事務局
〒340-0156 幸手市南1丁目5－8
TEL・FAX 0480-42-3036

出演者　財団法人 日本民謡協会安来節保存会関東川越連合会社中
主催　㈶日本民謡協会　平成23年度 民謡民舞全国大会　10月13～16日　於 両国・国技館
東日本大震災復興支援

会員の声コーナー

安来節百年 歌を運んだ海路について（その一）

棚橋　保
（東京支部長）

どんな場合でも歴史を概観する場合、どういう事が基本的な事なのかという視点が大切だと思う。以下表題に関連して考えてみたい。

第一に海上輸送の歴史と各地での民謡の形成とは各地の生活に根ざした人類史的に古い生活そのものが源流としてあると思う。

第二に日本海側にはその地方の名曲というばかりでなく、日本を代表する名曲が多い、安来節、佐渡おけさ、越中おわら、十三の砂山、これらの唄の形成は帆船の発達によって「はいや節」が影響したことは間違いないところだと思う。しかしそれとの関わり以前にそれぞれの人々の生活があった。

第三に第二にあげた民謡には「哀調」のある響きが特徴である。例えば佐渡おけさは金採掘の労働者の苦悩が源流にあると思う。このおけさ調が鰊景気につられ、佐渡ヶ島の遊女が北海道に渡り、浜小屋おけさとなる。その悲しい哀調のあるメロディー歌詞は人の心を揺さぶってやまない。

第四に私は平成二十三年十一月二十二日～二十五日、三十年来の念願かなって、青森県津軽半島の十三湊に行き、「十三の砂山」で現地の方々と交流して来た。哀調切々としたいぶし銀の名調子、歌詞が当時をしのばせる「弁財船・弁財衆」が使われている。これがもともとは山形県の酒田節が津軽の十三湊に入り、十三節となり「十三の砂山」となったといわれている。

この酒田節は享保年代初期（特に二年・五年）新潟県上越地方は旱魃と長雨で凶作となり、餓死者、一家離散などの悲劇がいたる所に続出した。その惨状を救ったのが、酒田の船頭弁財衆、亀田伊兵衛であり、それが新潟県大潟町無形文化財「米大舟」保存会として残っており、山形県酒田市と交流が行われている。なお現在の酒田船方節とはまったく違う。

第五にこうしてみると歌を運んだ海路（歌い継がれて 安来節百年」二十二頁）に点としてある十三湊・酒田・今町（直江津）が、十三湊―酒田―今町（直江津）という線として加えても良いのではないかと思っている。

安来節を習ってよかったなー

一場寛詔
（広島南支部）

趣味を持つとか芸事を習うとかは五十歳を越えて定年が近づいて来たサラリーマンなら風習として習い始める事が多いものです。

我が広島南支部の特徴は小学生や中学生の皆さんが十名近くメンバーに加わっており、バリバリ成長しております。子供達の成長ぶりを側で見物していたお母さん方が「私もやってみよう」と入会して下さり、親子で会員になられた方が何組もおられます。

一　例

教室が開設された当初、宮本唯明さんとその息子さんが同時入会されました。成長もほぼ同じ位のペースで進行し、資格審査も全く同じでした。息子さんは小学生から中学生になられ、クラブ活動は一番人気の野球部に入部され、入部早々は一年生部員が多く、自己紹介する時がやってきました。「〇〇小学校出身、名前は〇〇〇〇です。」その野球部は何か必ず一芸をやらなければならなく、ほとんどの新入部員は母校の校歌を歌われますが、彼は一工夫してお父さんと一緒に習った安来節を披露し、以降監督から「おい、安来節の宮本」と呼ばれたそうです。監督はたくさんの新入部員の名前を覚えるのに一苦労され、何か特徴を見つけては指導されますが、彼にはいつも「おい、安来節の宮本」と呼び、代打指名、一年生の後半からは出場メンバーに抜擢、二年生からはレギュラーになられました。

二　例

当初からの入会者である岩手県出身の井上成子さんは、孫とその友達数名を唄・絃・男踊り・銭太鼓・鼓と五種目オールラウンドプレーヤーを目指しての熱血指導です。子供達の成長につれて高価な三味線が全員に渡らないのが悩みで、何とかマイ三味線を与えてあげたく、高齢で脱会された方から譲り受けたりなどされ助けられています。また、どじょうすくいの衣装も体の成長と共に窮屈になり、昔、使われていた方を探して譲り受けたり、ＪＲ横川駅周辺の古物屋を尋ねたりの繰り返しです。古着を縫い変えて与えています。この子供達が二年前の優勝大会の少年の部で優勝と準優勝して優勝旗を持ち帰り、支部全員で喜びました。岩手県と言えば冬場の気温は氷点下で寒い、冷たいは地元の方言で「しばれる」と言います。その寒い所で生れ育った粘り強いど根性の井上さんは縁あって広島に来られました。最近、井上さんに嬉しいニュースがありました。岩手県の中尊寺が世界遺産となった事です。子供の頃の遊び場だっただけに感慨無量と大喜びです。東北人独特な謙虚な性格と心優しい親切がたまらないくらい美しいです。

一昨年、広島市安佐北区白木地区の農業祭に子供達全員で出演し、全種目を披露しました。初めての出演で小さな子供達からお年寄りまで地元の皆さんは初めて生の安来節を見て大喝采でした。主催者より「また来年も再来年も続けて出演して下さい」と依頼を受けました。耳伝えにあっちの老人ホーム、こっちの病院からと声がかかり、嬉しい悲鳴です。微力ながら安来節の勉強を続けます。

平成24年唄い初め会支部競演結果

安来市長賞	神門支部
安来市議会議長賞	加茂支部
安来市観光協会長賞	大東支部
安来商工会議所会頭賞	飯南支部
ＢＳＳ山陰放送賞	益田支部
足立美術館賞	神戸支部
家納喜賞	米子支部
安来節演芸館賞	大社支部

事務局からのお知らせ

会報安来節第34号の記事に誤りがございました。

訂正してお詫びいたします。

【訂　正（削除部分）】

Ｐ４　支部紹介

中村英生さん（東京支部）

最後の５行

「このような節目行事が開催できるかどうかは「会員数次第」と思うこの頃ですが、それが実現できるよう皆様と共に取り組んで行きたいと思います。」

平成二十五年度予定の「大師範以上研修会」の日程に誤りがございました。

訂正してお詫びいたします。

誤　平成二十四年十一月十二日（日）

正　**平成二十四年十一月十一日（日）**

安来節保存会 会員特典！

次の施設で安来節保存会会員証をご提示されますと次の特典が受けられます。

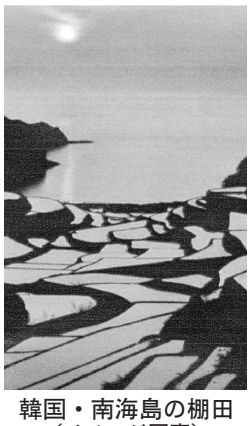
- 足立美術館入館料 2,200円が 2,000円
- 安来節演芸館 観賞料半額

2012年10月24日～28日

韓国・国際親善交流の旅

近くて遠い韓国から 近くて近い韓国へ

- **費用**　予定12万円代（燃油サーチャージ等含まず）
  旅行費用は４月頃確定します。
  舞踊交流関係費含む・添乗員同行
- **交流先**　韓国・南海島農楽団（農民舞踊）と プサン農民舞踊団の２大交流
- **ホテル**　プサン２泊　４ツ星ホテル
  南海島１泊　民宿又は スタンダードホテル
- 主催　安来節保存会東京支部



韓国・南海島の棚田
（イメージ写真）

あなた専用の
安来節伴奏テープ作ります！

伴奏があればなぁ…と、くやしい思いをした事ありませんか？
ご自身で唄ったもの（手拍子で唄っても可）を録音して送って下さい。ご希望があれば書添えて下さい。

製作料：８，０００円～

©安来市

〈申込先〉
安来歌人　一宇塾　代表 丸瀬一宇
〒692-0055 島根県安来市飯生町883
ＴＥＬ：0854-22-5323　携帯：080-5235-0250

※安来節選定歌詞歌唱参考歌集発売中
素唄の一部、初段、二段、三段、准師範、師範
全歌詞収録　ＣＤ５巻セット　価格：10,000円